

中世における領主階級の

女性の地位と役割（二）

——フロイス『日本史』に見る——

西村 汎子

最初に本論文の目次を掲げる。

はじめに

- 一、領主階級の妻、母の位置づけ
- 二、結婚と離婚の実例
- 三、土地所有、家臣・領民への支配権
- 四、宗教活動
- 五、布教への妨害活動
- 六、迫害に対する支援と抵抗
- 七、戦乱中での活動
- 八、弱者への人道支援
- 九、女性領主たちの行動力を支えたもの
おわりに

上のうち、第三章までは、すでに「中世における領主階級の女性の地位と役割（一）」として、本紀要の三八号（二〇〇二年）に掲載した。この前稿では領主階級の女性の、家族・家臣との関係における立場、婚姻慣習と結婚・離婚の状況、土地所有に基づいた直属家臣・領民に対する支配権の発動など、領主階級の女性たちがおかれていた立場、権利と権限などについて見てきた。本稿では第四章以下のキリスト教の布教を中心とする領主階級の女性たちの諸活動を見ると共に、その活動を支えた背景についても考えたい。

四、宗教活動

女性信者が家族を感化 フロイスは、女性のキリシタン信者が父母、夫、子供らを説得してキリスト教に向かわせた例を多く挙げている。とくに夫への感化について本稿の（二）の第一章「領主階級の妻、母の位置づけ」でも述べた通り、「私は多くの婦人に、使徒聖パウロの『不信心者の夫は信者の妻によって浄められるであろう』（コリント前書、七の一四）との言葉が実現したのをはつきり見た」といつている。

第二章の「結婚と離婚の実例」で挙げた平戸の島々の「獅子の長」の妻の話も、信仰心の冷めた夫に対し、信仰に立ち返らないならば離縁すると迫って夫の考えを改めさせた例であるが、そのほか、五島のマリアという教名の女性は、両親、夫、

二人の兄弟がいずれも迫害に負けて信仰心を失っていた中で、ただ一人処刑に耐える覚悟で信仰に踏みとどまり、まず病気をきっかけに父・母を、次いで兄弟と夫を信仰に立ち返らせたという。²

また、フロイスとほぼ同時期(一五九〇〜一六一五年)に滞日したイスパニアの商人、アビラ・ヒロンはその著『日本王国記』の中で、古田山城守の家来の清田シモンが主君に脅迫されて背教の証文を手渡したところ、妻マリアが直ぐにその場の夫のもとへ駆けつけ、「誰があなたの心をそのように惑わしたのか、あなた様を創られた方への務めよりも、束の間の主人への務めを先にされるとはどうしたことか」と諫め、我に返った夫が即座に主君から署名した証文を取り戻した例を記している。³

毛利輝元の叔父で家老の小早川隆景の弟、藤四郎も、豊臣秀吉からの迫害に対する恐れと、養子にしてみらう予定の兄、隆景への配慮から、信仰への関心を示さずにいたが、大友宗麟の娘で藤四郎の妻のマセンシアとその乳母の熱心な説得により、障害を乗り越える決心で司祭と修道士を久留米城に迎え、教理の説教を聞いた。藤四郎は信仰に立ち返り、聴聞した城内の家来三六人もキリシタンになったという。藤四郎は西国地方のキリシタン宗団の支柱となるように期待された人物であったから、彼が信仰に立ち返ったことの周囲への影響は大きかったという。⁴

女性領主が家臣・領民を入信させる フロイスは信者について

て、「最も得るところの多かった人びとは、彼らを現世に縛るものが何一つない貧乏人や謙遜な人たちであった。御殿の人や富者たちはあまりにも浮世に執着があったからである。」と述べ、純粹な信者は貧乏な人たちの中に多くいたと言っている。彼らは方々の村から群がり集まってきた、困難のある度に教会に助けを求め信仰によって苦難を和らげられたという(『日本史』6巻 豊後編I 一二章 一四〇頁)。しかし、宣教師たちが領主層を信者に獲得することは、その領内での布教の自由を得られるばかりでなく、主君の入信によってその家族、家臣、領民たちの集団的な入信をもたらした。

男性領主の例で見ると、大村純忠は一五七〇年頃、時期を見定めて主だった家臣たちを集め、自分と一家の者が受洗することを告げ、「貴殿らは望むならば他の殿を求めて行くも差し支えない」と言った。彼の領地の主だった者たちは彼の意向と決意に賛成した。彼と一家が受洗する時には百人ばかりの者が同時に受洗した。殿の激励により教理の説教を聞いて理解した家臣たちは百人、五百人というようにキリシタンになっていた。⁵

女性領主も男性領主と同様に家臣・領民を教化した。すでに本稿の第三章「土地所有、家臣・領民への支配権」で、一部大和守の妻の例と、有馬晴信の乳母の母親の例をあげた。一部大和守の妻は夫の死後、自分の領地に司祭を派遣して説教させ、司祭は二か村の人たちをキリシタンに改宗させ、五百五十人が受洗するに至った。この例では、彼女は司祭を派遣するに当た

り「私は家臣の何びとも異教徒のままでいてもらいたくありませんので」と語っていた。家臣たちには「全員、われら（司祭ら）の教えを聴聞するように、そしてそれに理解を示した者は受洗するようにと命じた」という。「理解を示した者は」との条件付きであつたにせよ、以上のような領主の意向の下では、家臣の入信はほとんど強制されたものであつたと推測される。（もつともそのうちの二人の仏僧は改宗する前に民衆の前で修道士と幾度か宗論を交え、数日間デウスのことを聴聞した上で洗礼を受けたという。）有馬晴信の乳母の八十一歳になる母親が受洗する時には、「二人の孫、八十人の家人、親戚、下女、友人たち」が共に受洗した。

有馬晴信の姉で西郷信尚の母の入信が家族、家臣に及ぼした影響も大きかった。それ以前の彼女は法華宗の熱心な信者で、キリスト教の教えに耳をかそうとしなかったため、彼女に倣って三人の孫も、息子の嫁も、また「彼女に完全に従属している約千人の家臣たち」もキリシタンになろうとはしなかった。彼女の入信拒否は、晴信の尊敬する司祭コエリユも布教の大いなる障害と考え、一五九〇年、彼女への働きかけを晴信に遺言として託したほどであつた。彼女は後に晴信らの説得により一人の孫と三十人の家臣と共に洗礼を受けた。

領主層の女性による経済的援助 領主層の女性たちはまた、教会、修道士、キリシタン達に経済的支援をした。細川忠興の妻、ガラシャは、修道院へ出かけて以後、神学校の少年や司祭

たちに二本の銀の棒をはじめとして、日常的におびたらしい品物を贈った。また、教会の近くに住むキリシタンの老女に米その他の品を贈り、他の貧しい人たちと分かち合うようにさせた、という。籠手田安経（ドン・アントニオ）の妻（ドナ・イザベル）は古くからのキリシタンであつたが、夫が自分のために造つておいた建物を生前に用いることができなかったため、夫の靈魂のために役立ててもらいたいと願つて教会に寄贈し、その家屋およびキリシタン集団の庇護を引き受けた。彼女の息子である籠手田家の嗣子もキリシタン集団の世話を続ける意向であつた。領主層の女性たちによる経済的支援は、教会と修道士、キリシタンへの迫害が強まる時期にいつそう効果を發揮する。

五、布教への妨害活動

布教への妨害 『日本史』の記録は、本稿の第二章「結婚と離婚の実例」で述べたように、大友宗麟の妻が、兄の田原親賢と力を合わせて彼女の甥で親賢の養嗣子である親虎の入信を翻させようとして一室に監禁し、さらに宣教師に向かつて親虎を改心させないならば、教会を取り壊し、全員を殺害すると脅迫したことを伝えている。彼女はその後家族親族の信仰を妨害して神社への信仰に向かわせようとした。嫡子義統よしのの庇護の下にその妻が洗礼を受けようとした時も、この嫡子の母と妻の母が妨害した。とくに嫡子の母が、彼女が洗礼を実行するなら

ば自殺すると脅かしたため洗礼を延期せざるを得なかった。第三章「土地所有、家臣・領民への支配権」であげた前述の一部大和守南入道の年老いた妻が、命に反して受洗した家臣のマテオスとその監視を命じてあったデイオゴを殺害しようとしたのも、入信への極端な妨害行動である。

一五六三(永禄六)年当時、島原地方のキリシタンたちは領主の激しい迫害の下にあった。その中であつてかなり高い身分の教名をドン・ジアンという武士が、島原殿(島原純茂)の感情を恐れず修道士らを庇護していた。仏僧たちとキリシタンたちの対立が深まったが、彼らはドン・ジアンが身分が高く勇敢であつたばかりでなく、国内に多くの親族を擁していたので、何も企てることができなかつた。仏僧たちは島原の殿の母親でシヨウシュンという「鬼婆」と相談して、老女がひそかに毒を盛つて彼を殺すこととした。彼女は喜んでその提案を引き受け、彼の友を装つて親しげに茶会に招いて毒を飲ませ、数日後に死に至らしめたという。¹⁰ 島原殿はその翌年、隣領の伊佐早氏の脅威と台風の影響を、殿がキリシタンの滞在を許しているためだとする仏僧たちの攻撃に会い、一方では「母親である、彼の悪魔のような老女にけしかけられ」て心変わりし、修道士を島原領から立ち退かせた。¹¹ 島原領ではその後もキリシタンの信者が増大したが、一五六六年にもこの母親は仏僧や親族たちと蹶起し、島原殿に対し領内に一人のキリシタンも置かないように要求した。殿も同調してキリシタンたちに棄教を迫った。¹² 母親が

島原領主である息子の布教妨害政策に大きな影響力を発揮したのである。

六、迫害に対する支援と抵抗

豊臣秀吉のキリスト教政策 織田信長がキリシタンに対して保護政策をとったことはよく知られている。豊臣秀吉も初期にはキリシタンに対して保護政策をとった。彼は一五八七(天正一五)年の前半に九州に出陣し、薩摩の反キリシタン大名の島津義久を屈服させて新たに九州を分割した際も、キリシタン大名にも大きな所領を与えた。しかし、その直後の六月には宣教師の国外追放令を出した。二十日以内に日本から退去するように命じたが、便船の関係で半年間の猶予がおかれた。宣教師たちはいったん平戸に集められ、その後キリシタン大名の受け入れにより各地に分散した。フロイスも一五九〇(天正一八)年から長崎に滞在した(一五九七〓慶長二年、同地で死亡)。同年にヴァリニャーノが日本人キリシタン少年使節を伴つて、遣欧使節兼インド副王使節として来日し秀吉の謁見を受けた頃には、迫害の嵐がしばらく静まったが、一五九六(慶長元)年のイスパニア船サン・フェリペ号漂着を機に、秀吉は再び迫害を強め、イスパニア人を含む二六人のキリシタンを磔の刑に処した(二六聖人殉教事件)。キリシタンへの迫害は秀吉の追放令以前から反キリシタン大名や武士、仏僧、仏教徒たちによって

激しくおこなわれた。

宗教政策に影響を与える 秀吉の妻、北政所はキリシタンの扱いについてたびたび秀吉にとりなしたことがあった。一五八六（天正一四）年五月、関白秀吉は日本イエズス会副管区長ガスパル・コエリユを大坂城で謁見した。フロイスら四人の司祭ら大勢の教会関係者が随行した。この時は秀吉は彼等を大いに歓待した。その際、北政所は秀吉が彼等を優遇したことを彼に感謝し、バテレンたちには今後の尽力を約した。¹³同年、北政所はコエリユたちの要請に基づき、バテレンたちの国内での布教の自由および諸賦課の免除のために下案を作つて関白に認めさせた。¹⁴一五八七年には都の布教長が教会建設用に遠隔地から堺に運び込んだ五本の大木を、この町の代官、石田三成が秀吉に進言して、大坂城の工事のために八百名近い人々を使つて持ち去つた。これを聞いた北政所は「バテレンから五本くらい材木を徴発したとて差し支えあるまい」とする秀吉に対して、今まで秀吉が取り立てた人々は日本人であり、殿の家臣であり、殿が与えた俸禄や領地によつて身を立てている。しかし、彼らは外国人であり、殿の家臣でもなく殿からの俸禄によつて生計を立てているわけではない。彼らがシナやインドに向けてこのことを書き送れば殿の名誉は傷つくでありましょう、と諫言し、秀吉は彼女の道理に説得され、工事の監督に直ちにこの大木を返還させたという。¹⁵

同一五八七年の三月、秀吉は九州に出陣し、六月には宣教師

に対する嚴重な国外追放令を出し、都や長崎を初め各地の教会と修道院を没収した。北政所は五畿内を去る司祭たちに食料品を届けさせ同情の言葉を伝えたという。¹⁶さらに九州から帰還した秀吉に、「実のところ、世間の人々は皆、殿下はなんの理由もなく伴天連たちを追放されたのだ、と申しております」と言つた。秀吉はそれを聞くと、面に怒りを現しつつ「さようではない。（キリシタン宗門は）日本のあらゆる（宗）教に対して妨げになるものゆえ、予は彼らを追放するように命じたのだ」と答えた。¹⁷北政所はそれ以上話しても無駄だと思つて黙つたという。

被害者の救済 同年、堺で市民による殺害事件が起こつた。秀吉はかねがね堺で騒動を起こす者があれば重罪として、死刑に処し家財を没収すると命じていた。その場に居合わせただけで無罪の、日比屋了珪の娘婿の宗札Ⅱルカスとその妻（夫妻とも熱心なキリシタン）及び四人の子らが処刑されることとなつた。友人たちが助命を謀り、高山右近、千宗室、徳川家康の使者なども尽力したが効果がなかった。北政所も最初のうちは口出しできなかったが、秀吉の養女と結婚している宇喜多八郎の乳母（非キリシタン）が勇敢にも秀吉に直訴し、北政所の尽力と合わせて、妻子五人の助命を得ることができた。¹⁸北政所の秘書で既婚者のマグダレナは模範的なキリシタンであった。一五八七年に宣教師追放令が出ると、大坂城内にいるキリシタンの侍女たちは棄教を命じられるか城外に追放されるかが予想され

た。北政所は多年自分に仕えてきたマグダレナへの愛情から、キリシタンであつてもいっこうに差し支えないから関白の前だけとりつくりうようと言つたが、マグダレナがそれに同意せず、城外に出ることを懇願したので、北政所はマグダレナとジョアナに城外に出る許可を与えた。マグダレナの娘は関白に直接仕える身であり、財宝の鍵を預かつていたため、北政所は彼女には許可を与えなかった。彼女は関白に棄教を命じられたら磔になる覚悟だと述べた。マグダレナたちは友人たちの勧めにもかかわらず、大坂を離れず公然と一軒の借家に住んだという。¹⁹

迫害に対する抵抗 第二章「結婚と離婚の実例」で述べたように、豊後の国主大友宗麟の妻の兄で宿老の田原親賢と、イザベルと呼ばれた宗麟の妻は過激な反キリシタンであつた。一五七七(天正五)年、彼らは親賢の養嗣子の親虎がキリシタンになつたのを激怒して、司祭のフランシスコ・カブラルに対し、親虎を改宗させよ、さもなければ教会を取り壊し、そこにいる全員を殺す、と脅迫した。司祭たちが決死の覚悟を決めると、大勢のキリシタンたちが集まり、殉教者となつて司祭たちと共に死のうと、教会に立てこもつた。

このような熱意や勇敢さは男たちに見られただけでなく、「本性、弱く臆病な婦人たちのもつとも同様であつた。」すでに教会に籠もつていた「はなはだ名望ある貴人」の妻である数人の身分の高い女性たちが、彼女たちの幾人かはまだ若い身でありながら、それぞれの家を去り財産を残し、暗闇に乗じて教会に

やつて来た。彼女たちはどんなに説得しても心を動かさず、「敵が自分たちが女であるからとて助命しないようにと、主な祭日に着るような最良の衣服をまとい、自分たちが闘争の場に居合わすことになれば戦えるようにと、大小の刀を着物の下に隠した。」このキリシタンたちの「燃えるような熱意」は司祭たちに慰めと確信を与えた。親賢らは彼らの覚悟に恐れをなして教会を襲うことを思いとどまつた、という。彼女たちは既成のジェンダー役割を超えて武力で戦う決意を示したのである。²⁰

秀吉の迫害中の一五九〇(天正一八)年、堺では日比屋了珪の屋敷に、大坂では別のキリシタンの家に信者たちが集合したが、都ではメシアと称する「老いた未亡人である一人の貴婦人」の家に集合して、祝祭や宴会を催し、互いに信仰を認め、励まし合つたという。この女性は勇氣と同時にかなりの経済力を持っていたと思われる。²¹

同じく秀吉の迫害中、一五八八年の五島の島では、キリシタンの中に、自分たちの十字架が切り倒された後も、信仰に駆られその場所に密かに祈りに行く者が後を絶たなかつたという。「年寄りで信心深く、教名をマリアという」女性は「異教徒」たちに毒づかれても行くのを止めなかつた。彼女を阻止できないと分かると、一人の「異教徒」が現れて、跪いて祈つていた彼女を刀で斬り殺したという。²²

一五九三(文祿二)年、秀吉は名護屋城にとどまつた。大村の地はその地に極めて近かつたので、秀吉の「役人や高官」た

ちが頻繁に訪れ、物資や大工、船員らの調達、公役の取り立てが激しく、領内は疲弊した上に司祭たちの危険も増していた。司祭たちが大村の教会や修道院にいることは、領主の大村喜前にとって危険であるばかりでなく、秀吉の家臣によって教会と修道院を直ちに破壊されることが予想された。大村純忠はすでに亡く、奥方は夫が遺した隠居用の大きな家に喜前とは別の息子と住んでいた。奥方は「イエズス会の母親のような人」であったから、教会と修道院を救うために喜前の朝鮮出征中、それらの自宅を司祭たちに譲り、自分たちは大村の教会の施設に移り住んだ。役人たちは幾度か教会と修道院を解体し没収するためやってきたが、奥方の家臣や女中たちが出てきたので、奥方への配慮からあきらめて帰った。キリシタンたちが司祭をかくまったために、秀吉の家来は司祭たちが大村の地にいることが分かっていながら見つけることができず、司祭たちは布教の実を挙げることができたという。²³

大村喜前の妻も夫の不在中、義母に劣らずキリシタン集団を援助した。新しい教会を建てるために、彼女が寄進した一五〇タイスその他によって大量に購入された材木が、秀吉の役人に没収されることが確実なので、それらを夫の所有物のようにして自分の屋敷地の中に入れさせた。(出征した朝鮮ではあらゆる手段で捕虜にした無数の女性たちがいたが、喜前を初めとする大村のキリシタンたちは、「家を外にして従軍している間、貞潔の誓いを立てて身を守った」という。²⁴)

一五九三年、天草でも秀吉が名護屋に下ったことから新たな事態が生まれた。大勢のイエズス会員が秀吉の命に反して一カ所に集合しているのは許されない、と考えられることから、多くのキリシタン領主が学院の解体を要請してきた。司祭たちは学院は撤去しないが三つの部分に分けることにした。天草久種の母と奥方は殿に代わって領地を統治している兄弟たちと力を合わせ、隠れた二カ所に学院の建物を建設した。残った学院と教会の立派な建物をどうするかが問題であったが、学院＝修道院の建物には殿の母と奥方が移り住み、教会は普通の家に見えるように改装して難を逃れることができた。²⁵ 志岐の島の領主、日比屋了荷の妻は夫が小西行長と朝鮮に出陣中、城に残って「領地を統べていた。」この地には副管区長のゴームスがおり、絵を描く少年たちや、銅版製作者、その他司祭や修道士たちがいた。彼女は日頃から彼らを援助していたが、関白の役人たちが司祭たちの出頭を求めて手荒なことを開始すると、教会や司祭たちの家屋を破壊されることがないように、彼女も城を出て女中や子どもたちと一緒に教会と修道院に移った。教会と修道院は何の被害もなしに後に司祭たちに返却された。²⁶

七、戦乱中での活動

中世における戦争と女性の関係を初めて正面から取り扱ったのは藤木久志氏である。氏は中世の戦場においても、女性や子

どもが人さらい、人買い、レイブ、略奪結婚の対象とされたこと、領主の城は民衆の避難所として開放され、時には籠城した女性たちが戦った場合もあると述べた。²⁷ それより以前に安井九善氏が中世後期の野外の戦場において「西国には女性が参戦することに大きな抵抗はなかった」として、南北朝期の『園太暦』に記載されていた、山名勢の中に女騎が多くいたとの記事を紹介した。²⁸ 海老沢美基氏も応仁文明の乱期の『大乘院寺社雑事記』の分析から、武士の女性が兵員確保のための資金調達を受け持ったこと、戦員および補助員である「矢負、人夫」の中に女性がいたことを挙げた。²⁹ 私も編著書『戦の中の女たち』の中の「キリスト教宣教師が見た女性と戦争」において、本稿で史料としたルイス・フロイス『日本史』とヴァリニャーノの『日本巡察記』から、一六世紀後半の戦争の被害、戦闘員に対する女性の後方支援の役割、女性の戦闘への参加例などを取り上げた。ここではその一部を紹介する。³⁰

私たちの後方支援 中世において戦争におけるジェンダー役割は、基本的に戦士を男性、後方支援を女性がなっていた。ただし、女性の後方支援は中世では戦士としての男性武士の存在そのものを支えていた。ヴァリニャーノは一五九二年に書いた報告の中で、国替えの際に「武士はその負っている義務のために、妻なしには絶対に生活できないので、赴いた先の土地でただちに再婚」する。その領主に対して負っている義務は「妻が家を修め食事を作ってくれなければ、絶対に果たすことがで

きない」と言っていた。³¹ また、諸大名の家臣は「その義務に応じて、自らの負担でいっさいの奉仕を行い、領主は家臣に生計費を支給しないし、土地を分配する以外に何も支払わない」と観察していた。

当時の日本の戦士は主君に出陣を命じられると、上級の家臣から足輕、農兵に至るまで、武器と食糧を持参して従軍した。そのような準備は単身者には不可能で、妻がいて夫と共に日頃から土地を経営し、そこから得た家産を管理運用して家族、下人を養い、夫が出陣する時には夫や家の子、郎党の衣服、武器や食糧を整えて送り出す事が不可欠であった。夫の出陣中には領地と家屋および家族を守ることが妻に課せられた。前章で挙げた志岐の島の領主、日比屋了荷の妻の場合は夫の朝鮮出陣中、城にいて「領地を統べていた」とあって、夫の出陣中に領地に対する支配の全権を委任されていた。

戦争の惨状 一五八八(天正一六)年、薩摩の島津氏が大軍をもって日向・肥後の二方から大友氏の本拠の豊後に侵入した。総大将の世子義統は豊前の城に逃亡し、島津軍は豊後の政庁があった府内および宗麟がいた臼杵城を包囲した。豊後の国内は薩摩勢の蹂躪するところとなり、焼き払われ破壊された。彼らが通過した後には何一つ満足なものを残らず、少しでも抵抗する者は殺害され、おびただしい数の人質、とりわけ女性、少年、少女たちが拉致された。³³ 戦争の際に領民が城に避難できたか否かが問題とされてきたが、この時は、臼杵の城に大群衆が避難

してきた。村や町を焼きつくし奪いつくすこの時代の戦争の性格が、城主に民衆の避難所としての開場を余儀なくさせていた。「女たちは幼子を抱き、あるいは手を引いて歩き、子どもの命を助けようと泣きながら城に逃れていった」。城にたどり着いたところで、そこには家屋も食料もなく、群衆のために一面ぬかるみと化して悪臭を放つ泥土の上で、雪と夜露に堪えねばならなかった。³⁴ 府内では薩摩軍が近づく人と人々はいっせいに町から逃げ出した。狭い道では進むこともできないほどであった。「親たちは心ならずもその子どもたちを、そして夫は妻を置き去りにして行かねばならず、大声と悲鳴を上げながら彼女らを放置し、逃げ終えるために運んでいたものを捨て去っていった」。³⁵

一五八八年にフロイスは島津勢に蹂躪された豊後の領民の惨状を次のように言っている。

「その国の人々は（次の）三つのうちいずれかに属していた。その一つは薩摩軍が捕虜として連行した（人々）、他は戦争と疾病による死亡者、残りの第三に属するのは飢餓のために消え失せようとしている（人々である）。彼らは皮膚の色が変わってしまい、皮膚に数えることができそうな骨がくっついており、窪んだ目は悲しみと迫り来る死の恐怖に怯えていて、とても人間の姿とは思えぬばかりであった。（中略）彼らは生きるのに食物がなく、互いに盗賊に変じた」。³⁶

薩摩軍が豊後で捕虜にした人々は家畜のように連れ回され、島

原の地で二束三文で売り渡された。

領主の領国の国替えも戦争に劣らず惨状をもたらした。大友宗麟の死後、一五九三（文禄二）年、秀吉は朝鮮の役での戦線離脱の咎により、大友宗麟の世継義統から領国を没収し、豊後を直轄地として家臣に与えた。国替えは領主の一族郎党、兵士の総員の放逐をもたらし、国内は接収に來た武将や兵士たちにより地獄さながらの感を呈した。良家の女性たちもこの国から逃げ延びるために我が家を出るのが精一杯で、幼児を抱き、召使いか親戚の者たちと一緒に徒歩で逃げた。前国主、宗麟の後妻である奥方、娘らも例外ではなく、ごく少数の家来と共に小舟で他国に逃げ去った。³⁷

女性たちによる戦闘 女性が戦闘に参加した例を見よう。秀

吉は九州出兵後、肥後の国を二分して小西行長と加藤清正に与えた。天草地方は小西行長の治下となった。一五八九（天正一七）年、当時天草下島を支配していた志岐（諸経）、天草（久種）両氏が小西氏の城の普請役に応じなかったことから、小西、加藤両軍が秀吉の命により、志岐城を陥れ、ついで天草領の本渡城を攻撃した。天草久種の母の兄弟で、勇敢なキリシタンであった有馬義貞とその一族および大勢の家臣、治下の村落に住む人々が、妻子や家人と共に城に立てこもった。領民もほとんどキリシタンであったという。加藤清正はキリシタン集団に対して敵意を抱いていたので最初から武力で占領しようとして攻撃の手をゆるめなかった。小西行長はキリシタンであったため、

大勢のキリシタンの死を回避するために投降を勧告した。城主との談話が功を奏しようとしていたとき、清正は全軍を挙げて四度の猛攻撃を敢行した。城中の者は勇敢に応戦したが、労苦、および連日にわたる徹夜のために疲労困憊し、ついに城壁の一辺を崩されるに至った。このように戦局が極度の危機に瀕していたときに女性たちの必死の行動がおこった。

「城主ドン・アンデレ(有馬義貞)とドン・ジョルジ(天草——)の妻女、およびその娘や息子の嫁たち、またその他の貴婦人たちは、すでに自分たちの夫や親族の或る者は傷つき疲労し、また他の者は戦死を遂げてしまい、もはや人間的に救われる道はなく、しかも武器を手にして対処する他ないことを知ると、三百人ばかりの婦人たちは集合し、自分たちが直面している切迫した危険を明白に認め、女性としての本来の弱体と臆病を忘れ、勇敢な女侍のように全員が一丸となって戦局を盛り返し、自らの限りを尽くして敵に抵抗しようと決意した。(中略)(彼女たちは)娘であると既婚者であると寡婦であるを問わず、より自由に、妨げられずに戦えるようにと全員が髪を断ち切り、(中略)ある者は鎧をまとい、他の者は太刀を帯び、またある者は槍とか、その他その場で入手できた種々の武器でおのの身を固めた。大勢の者が兜をかぶり、コンタツのロザリオや聖遺物を頸に掛けた。彼女たちの多くは、泣きじやくり涙にくれる乳呑み子や子供たちを家に遺していたが、母性愛をも忘れ、全員挙ってイエズスの御名

を唱えながら、勇猛心を(ふるい起こし)、最大の激戦が展開している戦場を目指してまっしぐらに突入した。彼女たちは倒された城壁の入口から敵が侵入してくるのを妨げようと、勇猛果敢な戦いを演じ、敵に多大な損害を加え、また多くの戦闘において、その勇気によって勝利を収めた。壕はその箇所では彼女たちが殺した敵兵で埋まるほどであった。」³⁸

だが、清正の兵士は恐るべき勢いをもって猛攻撃を加え、三百人いた女性たちのうち二人の重傷者を残して彼女たち全員が刃で殺され、身を曝した。男女、子供を含め千三百人のキリシタンが落命した。清正の側も二千に近い兵士が戦死した。

『続撰清正記』の記事は、「本渡落城のとき女人働の事。本渡の城の本丸までせめ入りたる時、敵三十人ほど具足甲を着て、鎗長刀を持つて撞と切りて出たるを、追取刀で一人もらうさず、討捕て見れば、男は一人もなく、皆女人なりける故に、首をとらず斬捨ける、此時手疵負たる者五七人有けるを、傍にて申けるは、いかに働共女人にきられ突れたるは、よはきやうに、とりざたしけるを、清正聞召、定てこれは不吟味なる若輩共の申分なるべし、女人はのがれがたき所にても、命を惜むが世以てならひなるに死をかるんじ思切て出たる心中は、却て男子より堅固なるべし、手疵負たる事も越度ならず、さりながら働男^{あるまじきこと}ほど有聞布事なれば、高名にはなりがたし、」と清正の言を伝えている。³⁹

このような緊急事態においては女性も戦闘力を発揮すること

があったことが分かる。ここでは野戦ではなく防衛戦である。清正の言葉は、人数の点でフロイスの記録と大差があるが、現実には女性軍の攻撃を受けて多くの死傷者を出したこと、死を覚悟した女性の行動は男子より堅固なことがあると女性軍の強さを認めながら、男ほどの働きがあるはずはないと、女侍をあくまで正規の戦闘員とみとめないジェンダーの立場を取っている。この時のキリシタン女性たちの弾圧に対する激しい抵抗は特記すべき出来事であり、此の事実から、中世において非常事態とはいえ、このようなジェンダー役割の揺らぎが生まれる余地があったことを考えさせられる。

八、弱者への人道的支援

堕胎と捨て子 一五六七（永禄一〇）年に堺の町に滞在していたフロイスは、日本の堕胎と捨て子の慣習について、次のように述べている。

「日本では婦人の堕胎はきわめて頻繁で、ある者は貧困のため、あるいは多くの娘を持つことを厭うため、もしくははした女であるために、そうでもしなくては十分よく奉仕を続けられないから、その他の理由によって（それが行われている）。しかも、何びともそれを不思議とは思わぬのが習わしである。ある婦人たちは、出産後、（赤）児の首に足をのせて窒息死せしめ、別の（婦人たち）は、ある種の葉草を飲み、それに

よって堕胎に導く。ところで堺の市は大きく人口が稠密なので、朝方、海岸や壕に沿って歩いて行くと、幾たびとなくそこに捨てられている（そうした）子供たちを見受けることがある。（中略）彼女らは（赤）児たちを岸に置き、潮が満ちてその（児）らを完全に殺すようにするかそれとも壕に投げる。（そうすると）通常は犬が来てそれらを食べるのである。」

ある夜、あるキリシタンが、岸の小舟の中に捨てられて、犬にねらわれていた子供を見つけ、司祭に知らせて、費用を払って子供を育ててもらったとした。その後数名のキリシタンが司祭に忠告して、今後は関わらないように、もしも一般大衆や、貧しい婦人が子供を引き取って育ててくれると聞くなれば、夜が明けると八人も十人ももの生きている子供が司祭館の門前に置かれていたという事態が生ずるであろうと言ったという。⁴⁰ あるキリシタンの女性は一五八五（天正一三）年、司祭に対して異教徒であった時に自分は十八回堕胎したことがあると告白した。⁴¹

難病者の放逐 また、一五八八年の五島では、ある種の熱病、天然痘・癩病にかかった者を村の外に放逐する習慣があった。病人を村から半（里）離れた山の中の家に入れ、身内との交際を絶ったという。村の代官が出ていくように強制した。⁴²

貧者、捨て子の救済と医療、老人介護 司祭たちの中にはルイス・デ・アルメイダのように、喜捨によって豊後に病院を作って捨て子を収容したり、中国から薬品を取り寄せて腫瘍その他

の病気の治療に当たった人もいた。その他日本のクリシタンたち自身がミゼリコルジア（慈悲の組）という組織を作って弱者の救済に当たった。ミゼリコルジアはポルトガルに古くからあった隣人愛の事業を行うキリスト教的団体で一五世紀の末にはこの名の下に改組され、十六世紀から十九世紀の間に、ブラジル、アフリカ、インド、日本に多数設立された。日本では早くも一五六五年に、平戸の度島にミゼリコルジアの組織があったという。この島は籠手田安経に属しており、住民はすべてクリシタンであった。四人の組頭が投票によって選ばれた。組員の務めは貧民や病人を訪れること、病人に告白を促し臨終に付き添うこと、死者を埋葬することなどであった。⁴³

長崎では一五八三（天正一一）年、堺出身のジュスチノとその妻ジュスタらが中心になって、クリシタンたちが自費で立派なミゼリコルジアの教会を建てた。組長と組員を決め、集められた寄付金は貧乏な寡婦や孤児、病人、その他貧しい人たちに配られた。村落の外れに癩病患者たちのための家を造り、二人の組員が何不自由ないように世話をした。⁴⁴一五八五年にはこの会のジュスタが十二人の既婚の女性たちに呼びかけて、自分たちの修養に務めると共に、助けてもらえる息子や娘、親族のいない老女の病人を、喜捨によっていたわり養う一種の病院を作った。⁴⁵長崎のミゼリコルジアの会は一五九〇（天正一八）年にはさらに発展して、三つの病院―男子の老人用、貧しく見捨てられた女子の老人用、もう一つは癩病患者用―を経営し

ていた。貧者へ施しも行い、会員は一二〇人になっていた。ジュスタは夫に劣らぬ働きをし、剃髪して病院に移り住み、病人たちに奉仕した、という。⁴⁶

以上のようなミゼリコルジアの活動は、『日本史』の記述から分かるのは平戸と度島および都の三カ所だけであるが、会員たちは、おそらくはかなり経済力のある女性たちが、クリシタンの夫たちと力を合わせて貧しい信者たちも仲間に引き入れ、貧者・孤児の生活保護、病人の看護、身寄りのない高齢者の医療と介護といった社会の重要課題に取り組んでいた。人々から嫌われ見捨てられたハンセン病患者の看護にも当たっていた。その自主的で組織的な取り組み方は現代のNPOの活動とも共通したところがある。これらは現代まで引き継がれている社会福祉の重要課題であるが、十六世紀後半の死者が続出した戦乱の時代にはいつそう緊急性を持っていたであろう。その信仰に基づく人道的精神と行動力には驚かされる。⁴⁷

九、女性領主たちの行動力を支えたもの

妻、母としての権利 ここまで『日本史』の中の女性領主たちを分析してくる中で、彼女たちの主体的な判断力と行動力、活動の範囲と影響力の大きさは予想以上のものがあった。その行動力は、彼女たちの熱烈な信仰からくる意志の強さや生来の性格によることが考えられる。だが、その背景には、当時の社

会が領主層の妻、とりわけ母親ないし後家に認めていた権限と、彼女たちの活動を可能にする経済力が不可欠であったと考えられる。

武士の妻の役割については、毛利元就が亡き妻の妙玖を想って言った「内をは母親を以ておさめ、外をは父親を以て治候と申す金言」⁴⁸がよく取り上げられ、戦国期の武士の妻の役割は「内を治めること」であったと考えられている。ただし、中世における「内を治める」役割とは、本稿第七章でも述べたように現代の給料生活者の妻の家事育児などと異なり、「夫と共に土地を経営し、そこから得た家産を管理運用して家族、下人を養い、夫が出陣する時には夫や家の子、郎党の衣服、武具や食糧を調達して送り出す事」が必要であり、「夫の出陣中には土地と家屋および家族を守ること」を意味していた。大名の場合には城内をとりしきり、子らを養育する上に親族、家臣への配慮が加わり、夫の出陣中は、夫に代わって城と領地を守らなければならぬことさえあったのである。傭兵を手配することもあった。『日本史』の記録でも、志岐の島の領主の妻は夫の朝鮮出陣中、夫から全権を委任されて「領地を統べていた」。妻の役割が日頃から家の内のみならず、夫の外の活動をも支えるものであったから、非常時における夫の代行も可能であったと言えるよう。中世においては母の親権は父と同じく認められていた。特に夫が死んで子供がまだ家を継承できる年齢に達していない場合には、家産を一括して継承し、そのあとで跡目を継承する者

を定め、家産を分配した。このような後家の権利は中世前期までで室町期以降家督相続が始まって以降は無くなったとされてきたが、戦国期にもこのような後家の中継相続と跡職を定める権限が認められていたことが明らかにしつつある。⁴⁹家の跡継ぎを決めることは、家長の最も重要な権限である。本稿の第三章で挙げた平戸の一部大和守南入道の妻の場合も、夫が死んだあと、他に相続者がいなかったために、すぐに嫁いでいた娘が同家の相続権を受け継いだ（この場合は後家の中継相続ではない）、その母、すなわち一部大和守南入道の妻が「まだ、健在で、その家を治めていた」という。この母は自分の領地に司祭を派遣して二か村五百五十人を受洗するに至らせた女性である。この南入道の妻の「家を治める」役割とは、家長であった夫の死後、後家として家長に代わって領内の政治をとっていたということであろう。田端泰子氏はその著書『日本中世女性史論』の中で、そのような例として、一五八〇（天正八）年毛利輝元が井上元良の後家に対して「きう（給）地のきはうはさいはん候て、かの子ともとりたてくやく（公役）とうとりたている（緩）かせなく申付候へく候。（中略）なにへんに子ともせいいしん（成人）候事かんようにて候」と記した書状を与えて、母に給地の裁判権を与えていること、この裁判権の内容は「給地を知行し、公役を勤仕し、次代当主を育てることであった。」と述べている。⁵⁰

武家女性の財産権 女性領主の土地所有権については、本稿

の第三章「土地所有、家臣・領民への支配権」で、一応述べている。細川忠興夫人が父明智光秀が誅伐された後も、父の遺産として丹後の国で所領を持っていたこと、大友宗麟の娘、マゼンシアが小早川秀包に嫁した後も、筑後の国の相当部分を領していたことなどであり、前掲の一部大和守南入道の妻が宣教師を派遣した二か村も、彼女は娘が父親から相続した領地とは別の「私の領地」と言っていた。大友宗麟の前の妻も、大友氏が島津氏の攻撃に破れ、筑前、筑後、肥前、肥後の各地で反乱が起きた時、兄親賢の没落と共に、彼女の領地の大部分がそれら四つの地方にあったために大打撃を受けたとあり、彼女の領地が四カ国の広範な地域に散らばって存在していたことが分かる。⁵¹それらは彼女の勢力基盤だったのであろう。しかも、その所領がしばしば単に収取をもたらす財産であるだけでなく、封建的な領主権、すなわち領地に住む家臣や住民に対する支配権、裁判権を持つ知行地であったことは、マゼンシアが、迫害を受けた司祭たちをその地に潜入させ、身の安全と布教活動を保証できたこと、一部大和守南入道の妻が命令に違反した家臣から役職を取り上げ、死刑にしようとしたことでも知られる。そのほか、領主層のキリシタン女性たちは教会を建てるための材木など多くの寄付をしたり、司祭たちをかくまう家屋を建てたり、慈善、医療などの活動に携わっている。それには、領地と言わばき知行地から収取を得られるだけの小規模な土地にいたるまで、彼女たちが自由にできる資産が存在したはずである。

従来、室町・戦国時代すなわち中世後期の女性の土地所有権については、『世鏡抄』に記されていた、女子の得分は所領の千分の一で、それも主として嫡出に限られ、しかも一期の間の化粧料として譲られるとあるのを基準として考えられてきた。しかし、『日本史』の記述はそのような基準にはあてはまらない女性の財産権を示している。この問題についての研究は未だ少ないが、それらは旧来の説を改めつつある。

以下、戦国時代の武士の女性の相続権、婚姻に当たって持参した化粧料とそれらの処分権についてのこれまでの研究を見よう。城島正祥氏は「佐賀藩成立期の内儀方知行」において、戦国末期に大友・島津と覇を争った竜造寺氏の元龜・天正期（一五七三〜一五九二）の領国時代およびそのあとを継いだ鍋島氏の佐賀藩の寛文・延宝（一六六一〜一六八一）期の内儀方知行について研究した。⁵²それによると、大名藩主およびその支家の女性は実家の両親および夫らからの化粧田を五十石ないし千石ほども所有し知行しており、その収入を夫や家臣に貸銀していた。化粧田の処分は婚家の男子、女子や嫁に譲ることもあり、実家に戻すこともあったが、その扱いは知行主の自由処分に属したという。

宮本義己氏は中世後期から近世初期にかけての『萩藩閥閥録』所載の知行宛行状・安堵状・譲状の分析から以下のことを述べている。毛利氏領国の場合、(1)武家女性は娘への跡職相続が認められ、嫡出女子婚姻後は婿養子が跡職を継ぐが、離別の際は

婿養子から娘が知行を取り戻せた（悔返し権）。(2)女性も恩賞などにより新たに知行を宛てがわれることがあった。(3)家督相続者の交代の際に後家や父を失った女子が幾分かの知行、すなわち割分を与えられることがあった。(4)婚姻に際し、家領に応分の化粧免が与えられていた。（毛利輝元の子おひめは五千石）。(5)化粧免はその女子ばかりでなくその嫡男にも譲られ、時には女性を先祖とする新たな一家を立てる際の支柱になるとさえあり、高群逸枝が言うような単なる手持ち品ではなかった。毛利氏の領国における女性知行については、田端泰子氏が前掲書の中で改めて論証し、戦国大名領国では、知行地宛行や相続において女性の権限は根強く残っていたとし、女性に対する新知行宛行、家継承時の女子の跡目相続、婿養子を取った場合、公役勤仕のために婿が家を継承するが、娘への悔返権付であったこと、給地を与えられた女性の跡職は立てないのが原則であったが、例外もあったことを述べている。⁵³

また、高原三郎氏は「江戸時代の『分知』と『化粧料』」という論文で、大分県下の近世初期の史料の中から分知すなわち分割相続と共に大名家に嫁いだ女性の化粧料（田）の状況を調査した。⁵⁴近世初期の例ではあるが参考のために見ると、化粧料の例は、將軍秀忠の養女千代姫が一五九九（慶長四）年、豊前中津城に興入れたとき、豊後国玖珠郡において千石の化粧料を与えられたのをはじめ、稲葉一通夫人、細川忠利益夫人、黒田長政夫人、鍋島勝茂夫人、など七件と参考例二件が挙げられて

いる。参考例の前田利常夫人（將軍秀忠の娘ねね）の三万石、本多忠刻夫人（秀忠の娘）の十万石を別として、化粧料の石高は五百ないし千石で、大部分が千石である。徳川將軍家の息女、養女はすべて天領の中で、細川家関係は細川家領地の中で与えられている。参考例を除き、降嫁女性の化粧料は一代限りの特権と思われる。これ以後の將軍・大名間の婚姻に化粧料記事はなく、豪華な物品の持参に代わったようであるという。

大名家の例では、政略結婚、人質に宛てられた女性に相応の知行が与えられた例がある。長野ひろ子氏の研究によれば、一五八七（天正十五）年、朝鮮出兵後の人質強化策によって秀吉のもとに送られた島津義久の娘龜壽は、一五九七（慶長二）年と九年に父、義久と舅義弘から「当家の奉公」の功により一万二千石余り知行を与えられたという。⁵⁵

以上に見たような女性の財産権は、幕藩体制が確立する近世初頭を境に衰えてゆく。婿養子に対する女性の悔返権に制限が設けられ、化粧料が姿を消してゆくなどの変化が起ってくる。知行制から禄高制への転換が武家の男女の役割分担を変化させていったことがその原因であろう。

おわりに

筆者は以前に「中世における高齢女性の地位と役割——フロイス『日本史』に見る」と題する論文を書いた。⁵⁶その論文の目

的はその前に書いた「日本中世の老人観と老人の扶養」⁵⁷の中で老人男女の役割を検討したことをきっかけに、もっと具体的に史料の中で高齢女性がおかれた状況と実際に果たした役割を調べることにあった。そこでは日本人修道士ロレンソの老人観を通じて、老人の能力が評価されていたこと、高齢女性の地位と影響力がとりわけ領主階級の場合に意外に大きく、宗教活動と社会事業の局面において重要な力を発揮したことを知ることができた。

本稿では、「高齢」の枠を取り外して、領主階級に限ってであるが、女性全体の役割を検討することを目指した。史料としてルイス・フロイスの『日本史』の他にアレシヤンドロ・ヴァリニャーノの『日本巡察記』も併用することとした。前稿では取り上げなかった戦乱の中での活動も視野に入れた。

フロイスの『日本史』については多くの識者が研究材料としているが、『日本史』を通してジェンダーの立場から男性に比べて女性がどのような立場におかれ、どんな影響力と役割を果たしたかを調べる研究は行われてこなかった。高齢女性を扱った前稿と領主階級の女性を扱った本稿は、そのはじめての試みといつてよい。

一、筆者はこの研究によって、主として九州地方の領主階級の家族関係、とくに妻と母が家族内において占めていた地位、および婚姻慣習と結婚・離婚の状況について知ることができた。妻の役割は「内を治め」、夫の外の仕事にもかかわるもので、ヴァ

リニャーノが「日本人は領主に対して義務を負っていて、これは妻が家を修め(治める意) 食事を作ってくれなければ、絶対に果たすことができない。」と言ったように夫の奉公にとって不可欠であった。夫の留守や死亡時には夫を代行して家長の権限を発揮し、家の後継者を定める役割を果たした。母は父と同じく親権を持ち、子は母に従う義務を負った。妻の姦通は夫により死罪にされ、夫は幾人でも妾を持つことができ、いつでも妻を捨てることができたが、妻からも「夫に何の罪もないのに女がこれを棄てて」結婚することもあったのが当時の婚姻慣習であった。

二、女性領主の土地所有に基づいた直属家臣、領民に対する関係と支配権の発動などの実例を知ることができた。領地を所有する女性の場合にはその領地と家臣・住民に対して男性領主と変わらない封建的領主権力を発動していたことが分かった。

三、キリスト教の布教活動においては、女性が家族を感化する上で大きな力を発揮したこと、家臣・住民を不信させるに当たってはその信仰による影響力の他に、領主権の発動がかなり見られたこと、女性領主が宣教師や教会に対して相当な額の経済援助をしていたことが分かった。

四、女性領主の力が布教への妨害に向けられた場合には時として破壊的な力を発揮したことを示した。

五、キリシタンへの迫害に対しては、秀吉の政策への諫言、

無実のキリシタンへの助命運動をする者の中に北政所を初め女性の姿が見られ、宣教師と教会を守るために武器を懐にして抵抗した女性たちもあった。秀吉の宣教師追放令のもとでは領主の妻が屋敷を提供し、教会に移り住むなど身を以て行動したことを明らかにした。

六、キリシタンの武将がキリシタン住民と共に城に籠もって秀吉の家臣に抵抗し、男子たちが刀折れ矢尽きた時に、身分の高い女性たちが武装して戦闘に参加し、一時は敵に大きな損害を与えるなど、緊急事態にはジェンダーを超える活動があったことを紹介した。

七、キリシタン女性たちが男性たちと協力して、貧者・孤児の生活保護、病人の看護、難病者と身寄りのない高齢者の医療と介護といった、弱者たちの人道的支援を現代のNGOのような自主的な組織を作っておこなっていたことを紹介した。

八、最後に、女性領主たちの行動力を支えたものは何であつたかについて考察した。女性たちの強烈な意志と行動があつたことは勿論であるが、当時の女性たちの家族内での地位——法および慣習が、妻、母とりわけ後家に与えていた権限と、彼女たちの活動を容易にした経済力——男子には大幅に劣るとはいえ、認められていた跡目および財産相続権、持参財、時として封建的領主権を発動しうる所領の所有などが、その行動力の支えになっていたことを論証した。彼女たちの家族、家臣、住民に対する影響力、宣教師その他に対する経済的援助は、それ

らの存在なしには到底考えられなかったであろう。女性たちの法的地位と財産権は近世とくに近世初期を境に変化を遂げていくと思われる。

(完)

註

- 1 『日本史』11巻 西九州編3 七六章 二五九頁 一五八八年の記事
- 2 『同』同巻 同編 同章 二五四頁
- 3 『大航海時代叢書』11巻 岩波書店 一九六五年。拙著『古代・中世の家族と女性』の「歴史変革と女性」吉川弘文館二〇〇二年
- 4 『日本史』11巻 西九州編3 六七章 一八八～一九一頁
- 5 『同』9巻 西九州編1 二一章 三三一～三三六頁
- 6 『同』11巻 西九州編3 八九章 三九五～三九八、四〇八頁
- 7 『同』5巻 五畿内編3 六二章 二二二頁
- 8 『同』10巻 西九州編2 四〇章 一七八頁
- 9 『同』7巻 豊後編2 四二章 一九四～二〇〇頁
- 10 『同』9巻 西九州編1 七章 一二二～一二三頁 ドン・ジアンの実名は不明
- 11 『同』同巻 同編 九章 一五六頁
- 12 『同』同巻 同編 一六章 二六一～二六三頁
- 13 『同』1巻 豊臣秀吉編1 九章 二〇二～二二三頁

- 14 『同』同巻 同編 一〇章 二二〇～二二二頁
- 15 『同』同巻 同編 一二章 二五七～二五九頁
- 16 『同』5巻 五畿内編3 六一章 二二五頁
- 17 『同』1巻 豊臣秀吉編1 一九章 三七一頁
- 18 『同』1巻 豊臣秀吉編1 一一章 二三二～二四八頁
- 19 『同』5巻 五畿内編3 六一章 二〇八～二一〇頁
- 20 『同』7巻 豊後編2 三四章 九六～一〇二頁、三五章 一〇六～一〇九頁。フロイス『日本史』の註によれば、親賢は奈多八幡宮大宮司家の出身で、その後田原家に入嗣した。田原家は代々、国東半島の武蔵郷の椿八幡を崇敬していたという。
- 21 『同』5巻 五畿内編3 六五章 二七五頁
- 22 『同』11巻 西九州編3 七五章 二三八～三三九頁
- 23 『同』12巻 西九州編4 一〇六章 二〇五～二〇六頁
- 24 『同』同巻 同編 同章 二二一頁
- 25 『同』同巻 同編 一〇八章 二四一～二四三頁。この「迫害に対する抵抗」の項、拙著『古代・中世の家族と女性』「中世における高齢女性の地位と役割」参照。
- 26 『同』同巻 同編 同章 二四四～二四五頁
- 27 「日本中世の女性たちの戦場」『総合女性史研究』一六号 一九九九年
- 28 『女騎あまた』の記事「『ぐんしょ』三一四、一九九〇年「戦争と女性」中世後期大和の場合」『エスニシテイ・ジェンダーから見る日本の歴史』吉川弘文館 二〇〇二年
- 29 「戦争と女性」中世後期大和の場合」『エスニシテイ・ジェンダーから見る日本の歴史』吉川弘文館 二〇〇二年
- 30 『戦争・暴力と女性』シリーズ 1巻 『戦の中の女性たち』「三、中世の戦争・暴力と女性」の3 吉川弘文館 二〇〇四年
- 31 ヴァリニャーノ「日本諸事要録補遺」四 『日本巡察記』所収 一九〇～一九一頁 平凡社 一九七三年
- 32 『日本巡察記』七頁
- 33 『日本史』8巻 豊後編2 六七章 一七三頁
- 34 『同』同巻 同編 六八章 一八七～一九二頁
- 35 『同』同巻 同編 七〇章 二一七頁
- 36 『同』同巻 同編 七四章 二七六頁
- 37 『同』同巻 豊後編2 八〇章 三三八～三四一頁
- 38 『同』12巻 西九州編4 九一章 二五～二六頁
- 39 『同』同巻 同編 同章 註(28)による。『天草郡史料』二二の九二一頁
- 40 『同』4巻 五畿内編2 二八章 四九～五一頁
- 41 『同』11巻 西九州編3 五七章 一七頁
- 42 『同』同巻 同編 七六章 二五五頁
- 43 『同』7巻 豊後編 三〇章 四六頁
- 44 『同』10巻 西九州編2 四七章 二六三頁
- 45 『同』11巻 西九州編3 五七章 一五～一七頁
- 46 『同』12巻 西九州編4 九〇章 一三～一四頁
- 47 都にもギリシタンたちが自費で建立したミゼリコルジアの

- 教会があつたが、秀吉が、宣教師の国外退去の令を司祭のコ
エリュに下した時、この教会も没収して「老いた色事の周旋
人」（施薬院全宗）に与えた。彼はただちにそれを解体して、
自分の屋敷地内に建物を立てた、という。『同』1巻 豊臣
秀吉編Ⅰ 一八章 三五四頁
- 48 「毛利元就自筆書状」年月日未詳 『毛利家文書』五四三
『大日本古文書』家わけ第八
- 49 宮本義己「武家女性の資産相続——毛利氏相続の場合」『國
學院雜誌』一九七五年七月。田端泰子『日本中世女性史論』
第三章戦国期女性の役割分担 九、後家の地位と権限 塙書
房 一九九四年
- 50 同右田端書 九五頁
- 51 「カリオン年次書簡」『大分県史料』一四 第三部 切支丹
史料之一（イエズス会の通信）
- 52 『社会経済史学』三八卷九号 一九七二年
- 53 田端前掲書 第三章 八 女性と知行
- 54 『大分県地方史』八五号 一九七七年
- 55 『日本近世ジェンダー論』吉川弘文館 二〇〇三年 他に
江戸時代の女性の知行については、脇田修「幕藩体制と女性」
『日本女性史』三卷 東京大学出版会 一九八二年、があり、
將軍の息女や養女の化粧料、後家分、公家大名の娘の女子分
としての持参銀＝自由銀などについて述べている。
- 56 拙著『古代・中世の家族と女性』吉川弘文館 二〇〇二年
- 57 所収 二〇〇一年九月稿
同右拙著所収 二〇〇〇年三月稿
- にしむら ひろこ（日本中世史・女性史）
-
- Hiroko NISHIMURA : 'The Women's Status and Roles under the Feudal Lords in the
Medieval Japan (II) — Seen from the Stand Point of Frois's History of Japan